

藪塚にも川が流れていた

の虫を殺しまして、それから摺りつぶしたり叩きつぶしたりしてから水にさらしてアクを抜くという作業を行っていたようです。

赤山陣屋跡遺跡で見つかったこの遺構はそのアク抜き場の跡と考えられています。縄文時代の人々はアク抜き施設を集落のすぐ脇を流れる小川に作って、そのままでは食べられない木の実を食用にしていたようです。このように縄文時代の人々は自然の湧水や小川を積極的に利用し、生活空間の一部として取り入れていたようです。

能登 旧石器時代と縄文時代を合わせて狩猟採集経済の段階と言うんですね。狩猟というのは文字どおり獣を狩って肉を食べるということで、川で魚を獲るのは漁労ということにもなります。採集というのは植物の木の実だとかユリの球根のような根などを採って来て食べるということです。

旧石器時代と縄文時代の食事がどう違うかというと、旧石器時代は狩ってきた獲物をそのまま食べる、たとえば肉だったら火にあぶってそのままかぶりつくのでしょうか。ところが縄文時代には土器が発明されます。この土器の発明によって食料を加工・調理することが可能になりました。バーベキューからスープの時代ということになるわけです。食材の幅が広がり栄養状態が良くなったと考えられます。

今小島さんがお話した中に、とちの実などの話が出てまいりました。これらはそのまま食べると苦くてとても食べられない。タンニンという成分が多いためなんです、そのタンニンを取るために水にさらす工程が必要になるわけです。つまり調理・食料の加工という意味でも水がとても大切になってくるわけです。

今ちょっと漁労という話をしましたが、先程の遠坂さんの話は石の重り、石錘を中心に縄文時代の漁労についてのお話でしたが、さらに一歩進んで話していただけますか。

遠坂 群馬県では内陸漁労は遺跡のすぐとなりの川で行っているという見解があります。つまり遠くへ漁に出かけるという可能性は少ないということです。例としては桐生市の渡良瀬川沿岸にあります千網貝戸遺跡が上げられると思います。ここからは先程の石之塔遺跡と同じような石錘が41点出土しています。また先程、しんなし川について季節により水量が不安定で水量の変化する川と言いましたが、実はあの藪石住居の出た中原遺跡のすぐ南にあたる六地藏遺跡からしんなし川と思われる幅14メートルの砂の層が検出されました。加えて最近になり太田市の藪塚本町に近い西長岡宿遺跡にしながおかしゅくでも、少なくとも幅20メートル以上の川が見つかっています。これはしんなし川につながる可能性があります。これらの川幅がそのまま一つの時期の川幅だったとは考えられないですが、それなりの規模を持った川があったのではないかとということが想像できます。このように発掘を進めていくと今まで考えられなかった新しい事実が出てきます。

以上のことから今まで藪塚本町は川や水がない所と思われてきましたが、縄文時代の藪塚の町の真ん中に魚の多くいる清流が流れていたことが分かりました。今は藪塚には漁師は一人もいないのですが縄文時代にはいたのです。

またつい最近まで多くの農民もいました。しかし水田や畑が宅地化することで農家が少なくなっているのが現状です。そのうち農民も漁師も一人もなくなってしまう時代が来るのかもしれない。今後どんな人たちが生活するのか、そしてどんな町作りにするのかにかかってくると思います。歴史を調べるということは新しい町作りをするための思考の原点なのではないでしょうか。

能登 未来展望まで話が進んできました。最初に藪塚本町の石之塔遺跡を掘った時に、その付近は水がない所なのでそこから漁労具が出てくるということ